

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅠ(教員自由企画型) 2015年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	濁川孝志
研究課題名	四万十川流域での環境保全プログラムの開発：環境保全と自然体験フィールドとしての可能性	
研究期間	2015年度	
研究経費	100千円	

【研究の概要】

本研究の目的は、自然環境の保全が重要な社会的課題となっている現況にあつて、日本一の清流と謳われる四万十川流域をフィールドとした自然体験と環境保全学習のプログラムを構築するための現地調査をすることであった。具体的な検討項目として、以下の4点を考えた。

- ①カヤックを用いての河川の観察。なぜ四万十川が清流を保っているかの考察。
- ②徒歩での森林観察。森林の保全状況と河川の水質との関連性の考察。
- ③流域住民の四万十川への関わり、住民の環境保全意識の調査、検討。
- ④その他、流域の自然環境状況(動植物、野鳥の生態を中心に)の観察。

上記4点の検討結果を以下に要約する。四万十川がなぜ最後の清流と言われるまの環境を保ってきたかという点に関しては、残念ながら、いかに人間の活動が自然環境にネガティブな影響を及ぼすかという現実を再認識させられる結果となった。地域の人からの聞き取りにより、数十年前からこの流域では人口の減少が観られ、最近では各地で散見される限界集落のような状況が以前から存在し、人間活動の量の少なさが、自然環境を良好に保つ要素であることが伺えた。もちろん、そればかりではない。近年、四万十川流域では地域興しの一環として、「ツルの里づくり」「アユの瀬づくり」さらに自然再生事業として、森林の間伐や湿地の再生などの活動が行われ、これらは地域の観光的価値の増進と同時に環境保全に一役買っている。このような状況から、この地域が大学生の自然体験と環境保全学習のプログラムを実施する場所として有効であることが推察された。実際に、カヤックで川を下り、徒歩で森林を観察し地元の人たちと話をしてみたが、これらの資源を活用し、この地域で3～4日程度の学習プログラムを構築すること可能性は十分に認められた。

一方で、ネガティブな点も観察された。関東を起点とした場合、現地までの交通の便が非常に悪い。朝、東京を立って、現地に着くのは早くてもその日の夕方になる。また空路を使うのが現地への有効な手段であるが、その場合交通費も嵩む。従って、学生が向けのプログラムと考えた場合、現地までの所要時間と費用を以下に少なく抑えるかが重要な問題となる。

また、本研究の2つ目の目的は、生活の拠点としての自然環境の違いが人の健康状態や、価値観にどのような影響をもたらすかを検討することであり、今回は「自然環境豊かな地」との交流をつくることであった。この目的との関連で、四万十川流域の他、今治市玉川地区を訪問した。この地域で自然との繋がりを重視し、心身の健康増進の視点からマクロ・ビオテックに根差した食を提供する「カフェ・マグノリア」瀬尾留美子氏とお会いし、現在在住の自然あふれた玉川地区のお話を伺った。その結果、この研究の趣旨に賛同を頂き、今後研究を進めるうえでの拠点としての可能性を得られた。同様に、四万十川流域では、地域で民宿を経営する方との交流の中で同様の感触が得られた。この点に関しては、他の地域の可能性も視野に入れながら、今度前向きに検討してゆきたい。